

# 「高考日本語生」の持続可能な発展を実現するために

— 高校日本語教師へのインタビューに基づいて —

曹 鶴婷

## 要 旨

《教育部对十二届全国人大五次会议第5574号建议的答复》(2017)によれば、中国は「一带一路」国家戦略の一環として外国語の専門家を必要とし、教育を通じて学生の言語総合力向上を図り、国際的な人材を育成する必要がある。この文脈で、多くの高校生が大学入学試験の外国語科目として日本語を選択し、大学進学、大学院進学、就職、そして人生の発展に影響を与えることが増えている。しかし、これらの高校生は、将来さまざまな問題に直面する可能性があることに対する認識が不足していることが明らかである。

本論文は、中国の高校におけるベテラン日本語教師へのインタビューを通じて、この問題と解決策について明らかにし、学生、教師、学校の3つの視点から「『高考日本語生』の持続可能な発展の方法」を詳細に考察する。具体的なアプローチとして、高校生が日本語を選択する際に、将来のリスクと利益を十分に理解し、自己責任を持つ必要があることを強調する。

## キーワード

「高考日本語生」 日本語教育 持続可能な発展 インタビュー

## 1. はじめに

《教育部对十二届全国人大五次会议第5574号建议的答复》(2017) (教育部による第十二届全国人民代表大会第五回会議第5574号提案への回答、筆者訳)において、中国は現在、包括的な改革開放を進め、「一带一路」国家戦略を熱心 to 実施している重要な時期にある。この文書は、国際視野を持ち、外国語を熟練に操り、国際ルールを理解し、国際交渉に熟達した専門家を育成する必要性を強調している。さらに、国際的なガバナンスの専門家を養成し、国民の外国語能力を向上させるために、学生の総合的な言語スキル向上を目指し、中小学の外国語教育改革と外国語試験改革を推進する必要があると述べている。

この文書から明らかになる2つの要点は次の通りである。1点目は、外国語の専門家が英語に限定されないことで、中国が現在外国語の専門家を必要としており、その需要が多様な言語に及ぶことである。2点目は、学生を中心に据え、教師中心の「詰め込み教育」から離れ、外国語教育を改善する必要があるという点である。教育部の提案に従い、外国語学習の多様なニーズに対応するため、中小学の外国語教育改革が進行中である。

さらに、大学入学試験の外国語科目として日本語を選択する学生数が増加していることも示唆されている。しかしながら、多くの学生がこの選択が大学入学前や大学入学後、大学院入試、そして就職といった人生の段階において直面する可能性のある様々な課題について認識していないことが指摘されている。黎・王(2020:99)によれば、「日本語を外国語科目として選択する学生数は増加しているが、一部の学生は大学入試のスコア向上のためだけに日本語を選び、将来のキャリアにどのような影響を及ぼすかについての理解が不足している。」(訳は引用者による)と述べている。これらの問題は、高校段階で日本語を大学入学試験の外国語科目として選択した場合に既に存在しており、急速な学習が大学での日本語教育目標の達成に多くの障害を残すことも指摘されている(唐, 2020)。

このような背景から、筆者は「高考日本語生」が何を得るか、何を失うかを理解する必要があると考えています。彼らがより良い人生を築くために、「持続可能な発展」を実現するために、本論文では、高校のベテラン日本語教師へのインタビューを通じて、現在の高校の日本語教育に存在する問題と解決策について詳述する。

そこで、本研究は、「高考日本語生」がより良い発展をするための方法を探ることを目的としています。この目的を達成するために、以下の研究質問(RQ)を設定した。

1. 「高考日本語生」がより良い発展をするためには、高校段階において、学校は何をすべきか。
2. 「高考日本語生」がより良い発展をするためには、高校段階において、教師は何をすべきか。
3. 「高考日本語生」がより良い発展をするためには、高校段階において、学生自身は何をすべきか。

この研究を通じて、大学入学試験で日本語を選択した学生の成功に貢献するための方策を探求し、彼らが持続可能な発展を実現できるようサポートすることを目指す。

## 2. 研究デザイン

本研究は、インタビューを主要な研究手法として採用した。具体的には、Zoomを用いて60分間の1対1のインタビューを実施した。この研究では、半構造化インタビューを選択した。インタビュー開始前に、筆者は協力者に研究の目的を説明し、事前に協力者の同意を取り、インタビューの内容を全て録画した。

半構造化インタビューのために、筆者が用意した質問は以下の通りであり、1から4の順序で質問を行った：

問題1：現在の高校の日本語教育には、どのような問題があると考えますか？

本質問では、協力者に現行の日本語教育に関する問題点を明らかにするための洞察を提供した。

問題2：これらの問題をどのように解決すべきだと考えますか？

本質問では、協力者に問題の解決策についての意見を収集した。

問題3：これらの問題は、「高考日本語生」の大学、職業、人生の発展にマイナスな影響を与えると考えますか？

本質問では、問題が高校生の将来にどのような影響を及ぼす可能性があるかについての見解を尋ねた。

問題4：高校の日本語教育を改善するためには、どのような変化が必要だと考えますか？

最後の質問では、改善のための具体的な提案を協力者に尋ね、高校の日本語教育の改善に向けた方向性を探った。

### 3. 研究結果

#### 3.1 協力者の基本情報

表1 協力者の基本情報

匿名	性別	教職経験	職歴	インタビュー時間
梁先生	男性	5.5年間	2015～2019年 浙江のある機関派遣 2019～2020年 浙江のある私立高校	60分

出所：筆者が協力者の状況に基づいて作成

梁先生は現在勤務している高校において、日本語を教える教師たちを率いる指導者である。彼は高校の上層部に対し、日本語教育に関するさまざまな提案を行ってきた。彼はいわゆる「発声」できるリーダーとして、現在の高校の日本語教育に深く関わっていると考える。さらに、彼は高校の日本語教育現場で実践を行う教師でもある。彼は自らが勤務する高校だけでなく、他校の日本語教師とも積極的に交流を図っている。また、彼は高校の日本語教育改革に対して熱心な関心を持っている。このような背景から、筆者は梁先生が現在の高校日本語教育において一定の発言権を持っていると考えている。

#### 3.2 問題1のインタビュー結果

梁先生は、現在の高校の日本語教育について、学校、教師、学生の三つの側面から存在している問題について語った。

まず、学校の側面において、梁先生は高校の日本語教育が伝統的なアプローチで行われており、教師主導の「詰め込み式」教育や試験対策の「問題演習」戦略が広く行われてい

ることを指摘した。しかし、これらの方法は教育省が提唱する言語総合力向上や学生の核心能力向上とは異なる戦略である。唐(2020)は高得点を取る「高考日本語生」と実際の言語能力との乖離が問題であることを指摘している。梁先生は、これについて非常に懸念しており、例として河南省の高校を挙げ、『標準日本語』を使用して高速でカリキュラムを終了し、反復的な問題演習に入る高校の実例を紹介した。

さらに、教師の側面では、梁先生は全国的に高校の日本語教師の採用基準が異なることを指摘し、これらの基準が全体的に低いことを述べた。一部の高校では、N2レベルを持っていれば高校の日本語教師になれることもあると述べた。また、日本語教育専攻の学生が非常に少ないことも指摘し、ほとんどの場合、日本語専攻の学位を取得した後に高校の教師になることを強調した。これらの教師たちは、日本語の知識はあるものの、教育の知識が不足しており、教育について試行錯誤していることを示した。

梁先生は、高校の日本語教師の待遇についても言及し、多くの高校の日本語教師が派遣され、機関からの圧力に晒されていることを指摘した。また、高校の日本語教師が英語の苦手な生徒を教えることがあるため、不公平な扱いを受けることもあると述べた。これらの要因が高校の日本語教師の質を低下させており、高校の英語教師と比較して昇進が難しいとの課題も浮かび上がっているとした。

最後に、学生の側面において、梁先生は多くの学生が大学入試の日本語に対して誤った認識を持ち、日本語学習に対する現実離れした期待を抱いていることを指摘した。多くの親や学校のリーダーも大学入試の日本語に対する誤った認識を持っており、これらの認識は機関の宣伝に起因していることを強調した。一部の学生は学習に真剣に取り組まず、日本語学習に対する姿勢が問題であることを指摘し、学生自身の能力が不十分である場合もあると述べた。

### 3.3 問題2のインタビュー結果

問題1で挙げられた現在の高校の日本語教育に関する問題について、問題1と同様に学校、教師、学生の視点からどのように解決できるのか語っている。

まず、学校の視点についてである。梁先生は、学校が進学率を考慮して伝統的な教育方法を変えるのは難しいかもしれないとの認識を示している。しかし、梁先生は、各地の高校が地域の研究活動を促進し、教育研究員を育てる取り組みを進めるべきだと提案している。なぜなら、多くの新任日本語教師が統一されたトレーニングを受けずに配置されており、教材の統一性が欠如しているため、高校間での日本語教育の有益な情報交換や議論が難しいからである。

次に、教師の視点である。梁先生は、優れた高校の日本語教師が積極的に発言すべきだと主張している。教師は教育現場で最前線に立つ存在であり、高校の日本語教育に関する実情を深く理解している。そのため、梁先生は、地位を持ち、発言権のある教師が高校の日本語教育に関する現状や課題を学生、保護者、学校、社会に伝えることの重要性を強調している。このような情報共有を通じて、高校の日本語教育に投じられる時間、エネルギー、リソースがより効果的に活用されることを期待している。また、高校の日本語教師が団結し、一人では小さな声かもしれないが、複数の声は無視できないという点を強調

し、共同で課題に立ち向かう必要性を指摘している。

最後に、学生の視点である。梁先生は、学生たちに対して、大学の日本語入試を軽く見るのではなく、熟慮を重ねて決定を下すよう呼びかけている。自己啓発と自己認識を促進し、大学の日本語入試と「高考日本語生」の状況を正確に理解した上で、責任ある判断を行うことの重要性を強調している。

### 3.4 問題3のインタビュー結果

梁先生は、「高考日本語生」に対して、大学専攻の選択には制約があるという立場を取っている。具体的な例として、軍事学校への入学が許容されないなどの制約が存在する。また、修士課程への進学においても、「高考日本語生」には選択肢が非常に限られると指摘されている。その背後には、多くの「高考日本語生」が英語に苦手意識を抱いており、そのために日本語を選択したことが関与している。このため、「高考日本語生」の多くは、英語のスキルが不足しているため、進学の選択肢が制約され、例えば東北地域などの大学にしか進学できないという制限が生じていると言える。

### 3.5 問題4のインタビュー結果

梁先生は、「高考日本語生」がより良い未来を築くためには、高校において積極的なキャリアプランニングを実施するだけでなく、学生や保護者、学校が大学の日本語入試を選択する際には、得られる利益だけでなく、同時に失う可能性も冷静に考慮すべきだと強調している。学生や保護者は、単に「噂」に惑わされず、大学の日本語入試に関する事実を正確に把握し、客観的に評価すべきだと述べている。

梁先生は、2つの具体的な例を挙げている。一つの例では、大学の日本語入試を「大学入試の総合点数を向上させ、優れた大学に進学するための手段」として選択し、同時に大学選択や修士課程への進学における潜在的な問題点を理解した上で、それでも大学の日本語入試を選択することの合理性を説明している。もう一つの例では、英語の基礎が脆弱な学生に対して、英語で大学入試を受けると二流大学にしか進学できないかもしれないが、日本語を選択して大学の日本語入試を受けると一流大学に進学できる可能性がある」と説明している。その結果、将来的に日本語のスキルを生かして日本への留学や就職などが可能になることを強調している。したがって、大学の日本語入試を選択すること自体が、大学の英語入試よりも必ずしも劣る選択肢ではないと指摘している。

最後に、梁先生は学生が何も情報を持たずに盲目的に大学の日本語入試を選択することを最も危惧していると述べている。

## 4. 考察

### 4.1 RQ1への考察

現在、高校のリーダーは進学率を非常に重視しており、その結果、高校の日本語教育現場では、梁先生が指摘したように教師主導の「詰め込み式」教育や、唐（2020）が言及した大学入試の日本語の高得点と日本語能力の不一致という現象が発生している。このよう

な教育の結果、「高考日本語生」は核心的なスキルを習得することなく、単なる「問題解答マシン」となってしまうている。これにより、大学に進学した際にも日本語専攻または非日本語専攻を選択する場合に困難に直面している。日本語専攻を選択する高考日本語生は、十分な日本語スキルが不足しており、そのために「日本語+」の教育を適切に受けることが難しい状況にある。逆に、非日本語専攻を選択する高考日本語生の多くは、英語に苦手意識を持っており、大学入試で日本語を選択した結果、英語スキルを疎かにすることで将来的に言語の制約を受ける可能性があるとして指摘されている。そのため、高校段階でしっかりと日本語の核心的なスキルを習得することが重要である。

次に、梁先生は現在の高校の日本語教師の多くが派遣制で雇われており、派遣機関が利益追求のために高校の日本語教師を過度に労働させる傾向があることを指摘している。派遣の日本語教師は、非正規雇用の立場であり、「外部の存在」と感じることが多い。一部の正規雇用の日本語教師でも、高考日本語生の「質」によって学校から十分な評価を受けないことがある。このような状況下では、教師の質を引き上げることが難しく、大学入試の日本語受験生が適切な指導を受けることが難しくなる。

したがって、高校は以下の点に注意すべきである。

1. 進学率だけでなく、教育の質にも焦点を当て、高考日本語生の核心的なスキルを育成するための努力を強化すべきである。
2. 高校段階であっても、英語教育に適切な配慮をし、言語のバランスを取るべきである。
3. 学校は高校の日本語教師に対する適切な評価と待遇を提供し、教師のモチベーションを高めるべきである。

#### 4.2 RQ2への考察

梁先生はインタビューで、現在の高校の日本語教師の日本語能力基準が低く、ほとんどの新任教師がクラスの管理などの教育能力に不足していると述べている。しかし、筆者は高校の日本語教師は時代に合わせて日本語のレベルを向上させる必要があると考えている。また、梁先生が指摘したように、地域の高校の日本語教師は交流を図り、研修会などの活動を展開すべきである。研修会を通じて、経験豊富な教師が新任教師を指導し、教育上の難題を協力して解決することができる。さらに、高校の日本語教師の団結によって、教育現場での課題を克服し、教育レベルを向上させることができるだろう。彼らは自身の権益を求めただけでなく、高校の日本語教育の発展を促進する役割を果たすことができる。

したがって、筆者は高校の日本語教師が「高考日本語生」により良い人生発展を実現するために、以下の点に注意すべきだと考えている。

1. 時代に合わせて自身の日本語能力を向上させ、生徒に対して責任を持つこと。
2. 自身の日本語能力の向上と同時に、教育能力の向上にも専念すること。
3. 地域や全国の高校の日本語教師との協力を通じて、研修会などの活動を展開すること。

### 4.3 RQ3への考察

「高考日本語生」の多くは、英語の基礎が弱い、学習の基盤が薄い学生である。そのため、学習姿勢が本来必要なものよりも不十分な場合があり、大学入試の日本語に対して運に頼ることがある。筆者は、このような「高考日本語生」に対して、まず学習姿勢を正す必要があると考える。どの分野でも、学びを上達させるのは容易ではないことを認識することが重要である。また、多くの生徒や保護者が大学入試の日本語に対して誤った理解を持っており、大学入試の日本語を選択することで外国語の高得点を取ることができると考えているかもしれない。大学入試を乗り越えるために、多くの生徒が日本語を選択しているが、大学入試の日本語を選んだ後にどのような問題に直面するかを理解していないことがある。したがって、筆者は生徒が自身の選択に責任を持ち、自己啓発に努めるべきだと考える。梁先生が指摘したように、大学入試の日本語を選択する前に、その選択によって得られるものと失われるものを理解した上で、責任ある選択をするべきである。

以上をまとめると、筆者は「高考日本語生」がより良い将来を追求し、持続可能な成長を達成するために、高校段階で以下の点に留意すべきだと考えている。

1. 高校入試の日本語を選択するメリットとデメリットを十分に理解し、選択を検討すること。
2. 日本語の学習において、学習姿勢を改善し、真剣に取り組むこと。

以上のような考えに基づき、筆者は「高考日本語生」に対し、大学入試の日本語を選択する際に、一時的な困難だけでなく、将来に直面する問題にも目を向け、自己責任を持つことを奨励している。大学入試の日本語を選択したことで得られるものと失われるものを理解することが重要である。

## 5. 結論

この研究は、高考日本語生がより良い人生の発展を遂げ、持続可能な成長を実現するために、高校段階から提案を行っている。筆者は、大学や就職などの段階で「高考日本語生」が直面する問題は、高校段階から着手することができると考えている。したがって、この研究は高校と大学の日本語教育の効果的な連携について提案を行っており、さらに「高考日本語生」がより良い人生の発展を遂げ、持続可能な成長を実現するための解決策を探求している。筆者は、「高考日本語生」が大学入試の日本語に関する十分な理解を前提として、自身に責任を持って選択を行うことを望んでいる。

もちろん、この研究にはいくつかの不足点も存在する。具体的には、本研究では教師の一人にしかインタビューを行っておらず、そのため検証の対象が限定的で、一般性や普遍性が比較的弱い結論となった。また、被験者の視点が比較的単一であるという制約もある。将来の研究においては、学校、学生、保護者などの多様な視点からのインタビューを行うことで、より包括的な情報を収集できる。

最後に、この研究が高校の日本語教育のさらなる発展や「高考日本語生」の持続可能な

成長に対して、新たな提案を提供することを願っている。

### 謝辞

本論文の執筆にあたり、早稲田大学日本語教育研究科の池上摩希子先生から貴重な助言をいただきましたことを心より感謝申し上げます。

### 参考文献

- 黎子程・王愛軍（2020）「高中日语考生的发展前景分析」『学園』第36卷, pp.99-100  
唐新豔（2020）「当下大学日语教学发展之困——以烟台大学为例」『教书育人·高教论坛』第10卷, pp.74-75  
中华人民共和国教育部教育部（2017）「对十二届全国人大五次会议第5574号建议的答复」  
[http://www.moe.gov.cn/jyb\\_xxgk/xxgk\\_jyta/jyta\\_jijiaosi/201712/t20171219\\_321937.html](http://www.moe.gov.cn/jyb_xxgk/xxgk_jyta/jyta_jijiaosi/201712/t20171219_321937.html)（2022年12月10日）

（そう かくてい 上海旅游高等専科学学校）